

# お薬のしおり

## 機能性ディスぺプシアについて No.137 (H25.7)

東京医科大学病院 薬剤部

みなさんは今までに胃の何らかの症状で受診をした際に、慢性胃炎や神経性胃炎と診断を受けたことはありませんか？胃炎とは、胃の粘膜に炎症が起きている状態を表しますが、胃炎があっても症状があるとは限らず、逆に症状があっても胃炎が認められないことも多くあります。そこで、症状があってもそれを説明できる異常が様々な検査でも認められない場合、胃の炎症の有無に関わらず、「機能性ディスぺプシア (FD : functional-dyspepsia)」と呼ばれるようになりました。

「機能性疾患」とは、内視鏡検査などで症状の原因となる異常が見られないが、臓器や器官などの働きが悪くなる状態を示し、「ディスぺプシア」とは消化不良を意味します。よって、「機能性ディスぺプシア」とは胃の痛みや胃もたれなどの症状が慢性的に続いているにも関わらず、内視鏡検査などを行っても、胃潰瘍・十二指腸潰瘍や胃がんなどのような異常がみつからない病気のことを示します。今回は、機能性ディスぺプシアの概要とその治療についてご紹介します。

【原因】胃が正常な状態である場合、胃は①貯留、②攪拌、③排出という3つの運動機能の役割を果たします。口から食べ物が入り、食道を経由し胃に入ると、胃の上部を広げて、胃の中に食べ物を貯える働きをします。次に、波打つように動く蠕動運動によって、食べ物と胃液を混ぜ合わせます。さらに、食べ物を消化して粥状にし、粥状になった食べ物を十二指腸へ送り出す働きを行います。このいずれかの働きに障害が起これば機能性ディスぺプシアが起これる可能性があります。また、脂肪分の多い食品、コーヒー、アルコール等の嗜好品、不規則な生活なども原因の一因と考えられます。

【症状】機能性ディスぺプシアの主な症状は以下の4つの症状が挙げられます。①つらいと感じる食後のもたれ感、②食事開始後すぐに食べ物で胃が一杯になるように感じて、それ以上食べられなくなる感じ、③みぞおちの痛み、④みぞおちの焼ける感じなどがあります。



【分類】機能性ディスぺプシアは、食後愁訴症候群（食後のもたれ感や早期飽満感が週に数回以上起こるタイプ）と、心窩部痛症候群（みぞおちの痛みやみぞおちの焼ける感じが起こりやすいタイプ）の2種類に大きく分けることができます。しかし、両方のタイプの症状が重なって起こったり、日によって感じる症状が変わったりすることもあり、どちらのタイプであるかはっきり分けられない場合も多くあります。

【治療】機能性ディスぺプシアの治療は、生活習慣の改善、食事療法、薬物療法が行われます。規則正しい生活を心がけ、ストレスから解放されることが重要です。また、毎日3度の食事を規則正しく食べ、その際にはよく噛み、ゆっくりと食べるようにしましょう。胃に負担のかかる食べ物を避けたり、煮る・蒸す・ゆでるといった調理方法がより好ましいと考えられます。また、薬物療法は、患者さんの症状や原因に合わせて適切なものを選択し治療を行います。

①消化管運動機能改善薬；消化管の働きを活発にし、胃もたれや早期飽満感などの症状に効果的です。主な薬剤は、ドパミン D<sub>2</sub>受容体拮抗薬（プリンペラン、ナウゼリン、ガナトン等）やセロトニン 5-HT<sub>4</sub>受容体作動薬（ガスマチン等）、漢方薬（六君子湯、安中散等）などがあります。

②酸分泌抑制薬；胃酸の分泌を抑え、みぞおちの焼けるような感じや痛みを改善させる効果があります。主な薬剤は、ヒスタミンH<sub>2</sub>受容体拮抗薬（ガスター、ザンタック、タガメット等）やプロトンポンプ阻害薬（タケプロン、パリエット、ネキシウム等）があります。

③抗うつ薬、抗不安薬；①や②の薬剤では症状が良くならない場合は、抗うつ薬や抗不安薬（セディール、ソラナックス等）が使われることもあります。

④機能性ディスぺプシア治療薬（アコファイド）；この薬剤は、機能性ディスぺプシアの適応を有した消化管運動機能改善薬として新しく発売されています。神経伝達物質のアセチルコリンの分解酵素を阻害することにより、胃の運動低下や胃からの食物排出遅延を改善させる働きがあります。なかでも食後のもたれ感や早期飽満感などの症状が強い食後愁訴症候群のタイプに対して効果が認められています。

機能性ディスぺプシアは治療することで症状が改善でき、食事を楽しんだり味わいながら快適な日常生活を送ることができます。何か気になる症状や思い当たる症状がある場合、またお薬に関して不明な点などがありましたら医師・薬剤師までご相談ください。

